

# 「読書」すること・「読解」すること

——「セメント樽の中の手紙」を通して——

八原 加奈

## I はじめに

授業で小説教材を扱うとき、よく教室でこんな声を聞く。「本を読むのは好きなのに、テストでは点数が取れない」「考えたのに×がついた」「好きに読めないから、教科書で読むの苦手」。生徒にとつて小説を読んで「考えること」は、自由に「想像すること」の場合が多い。そのため、自由に想像力を働かせる「読書」はできて、本文に基づいて考える「読解」に苦手意識や違和感を持つことがある。あくまで彼らにとつて「読解」はテスト用紙や授業での特別な読み方なのかもしれない。

しかし、実際には「読書」と「読解」の距離は、生徒が考えるほど遠くはない。何をどう読めば作品が「わかる」のか。単に試験のための読解法としてではなく、本文に基づいた読みを実践することで、より作品が深まることを伝えたい。そして彼らの「読書」体験が、ストーリーを追いかけるだけの単純で楽な作業では

なく、思考に負荷をかける苦しみがあったとしても、自己発見の楽しい作業に繋がることを示したい。これを大きな目標として小説作品の教材化に取り組んだ。

## II 指導にあたって

この授業は、二〇〇九年度龍谷大学付属平安高校第二学年クリエイトコースを対象に、「応用国語」の時間で実施した。「応用国語」は演習的な要素が強く、入試問題に対する読解力を養うことを目的とした週一回二コマ連続の選択科目である。前期は評論文の読解に取り組み、後期からは小説の実践問題読解に取り組む。今回はそれにむけた小説の読み方を示すきっかけとして、本文の具体的な表現に注目させ、短編小説を読み解きながら「根拠」を探す姿勢を身に付けさせることを目標とした。

葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」は、短編小説であるため根拠となる文章を示しやすい。さらに現実に即した作品であり作品

世界をとらえやすいこと、作品の提起する問題を自分の日常に置き、現代社会との共通点を考えさせることができることから教材に選定した。教科書には掲載されていないため、生徒には「読む力・考える力を高める現代文学名作選」（明治書院）から抜粋した本文を冊子にして印刷・配布した。指導には合計四時間をあて、プリントを用いた授業計画を立てた。

### III 指導過程

#### (1) 一時間目

一時間目は本文通読後、初発の感想をまとめさせ、小説の構成・時間・場所・人物を整理させることを取り組みとした。範読を始めると、与三の鼻の描写に笑ったりとしばらくの間教室はざわめいていたが、女工の手紙のあたりから静かになり、だんだんと読むことに集中しはじめた。生徒の意識が本文に注がれていくのを間近で見ながら、変わることを痛感した。読み終わった後「ほんとうにあったこと?」「かわいそう」と口々に言い、強い興味を見せた。しかし、特にコメントは付けず、他人の意見に惑わされないように、初発の感想を書き終わるまで五〇分程度は周りと話し合いをさせないようにした。その後、周りの人と自由に感想を交換する時間を設けた。生徒の感想は女工の手紙に関する部分がほとんどで、女工に共感する声も多くみられた。その反面、与三に関しては「キレイやすい人」「よく分からな

い」という意見が聞こえ、あまり共感や関心を示すものはなかった。

作品世界を立体的にとらえ、「可哀想な女工の話」で終わらないためにも、主人公である与三の人物形象をしつかりと確認する必要があると感じた。しかし、アルバイトが校則で禁止され、身体的な労働や貧困を経験していない私立高校の生徒に作品世界をどう実感させればいいのか。それが二時間目の大きな課題となった。

#### (2) 二時間目——松戸与三の立体化

第一段落をもとに与三の労働状態・生活状況がわかる表現を探し出し、与三の人物形象の理解に取り組んだ。与三の労働状況としては、まず完成間近の「発電所」の工事現場で一日に二時間「セメントあけ」や「ミキサーを掃除」していることを確認した。短い休憩が二回しかなく、鼻の掃除もできない、考える間もなにくらい忙しいことや、「日当一円九〇銭」しかないことなどから、肉体的な重労働、不安定な日雇い労働者だという意見がすぐに挙がった。与三の生活状況についても、長屋住まいで、奥さんと子供が六人おり、もうすぐ七人目が産まれることや、好きなだけ酒が飲めない、経済的に苦しい生活であることが指摘された。

しかし、「じゃあ、与三に対してどう思う?」と問いかけると、その境遇に対する同情よりも、与三の「嬢」や「子供」に対する

言動に「ムカつく!」「なんで優しくできへんの!?!」と多くの生徒が怒りを示していた。言葉の上で状況は分かっても、なぜ与三の苛立ちが生まれるのかは理解できない様子であった。それに加え、私が日給の物価計算を間違えたことで、さらに与三の体験に対する生徒の理解のギャップは広がってしまった。また生徒の意見を拾っていくうち、〈貧困〉と同じように、〈重労働〉も実感し難いことが分かった。生徒の中では確かに本文からそう読み取れるが、それがどうして大変なのかという疑問がどこかぬぐえないままなのである。そこで言葉だけで理解したつりもりのまま先に進むより、生徒の中に少しでも実感を生み出させたいと強く感じた。

どうしたら生徒に労働の実感を持たせられるのか。限られた時間と教室という空間の中でできることは少ない。思いついたのは、実際に生徒の身体を使って疑似体験をさせることだった。作品中で与三は一分間に一〇才(約二七・八ℓ)のセメントを作っている。全く同じようにはできないが、たった数分間の実験でも、実際それがどのくらいの労働量なのか、生徒が考えるきっかけになれば良いと思った。場当たりの思いつきだったので、そのときに教室にあったものを使うしかなく、しっかりとした準備はできなかった。教室に段ボールを二つ用意し、片方をセメント樽に見立てて床に置き、もう片方をミキサーに見立てて机の上に置いた。そして生徒から三〇本ほどベットボトルを集め、水を入れてセメント樽の段ボールに詰めた。それを一分間でミキサーの段

ボールに全て移動させられるように、機械的な規則正しいリズムで作業を続けさせた。最初は余裕の表情を見せていた生徒もすぐに音をあげはじめ、三分と続けられずに「これを一一時間!」「週に二回でもキツイわ!」「むしろこんな仕事したくない!」と不満を口にしていた。さらにセメントが無くなったら、一七〇キロくらいの樽を運ばないといけないことを伝えると、「無理!」と心から落胆の表情を浮かべた。

その後「仕事無理だったら、お金もらえないけど大丈夫?」と問いかけると、「働かないと食べられない」と答えた。また「食べないと働けない」ことにも気付いていた。その話し合いの中で、自然と与三の生活水準に関心話題がうつっていった。「九十銭で着たり、住んだり」という表現から、生活するには食費・家賃・衣服以外にどんなお金が必要かを列挙していった。本文を読み返し、「子どもが生まれるから出産費用がいる!」「生まれたらオムツ代」「ミルク……栄養不足って母乳大丈夫?」「一番上の子どもは学校いく年じゃない?」「冬やし寒さしのげるん?」など、生徒同士で問答を繰り返しながらの活発な意見交換が繰り返された。

一日目を終えて、はじめは女工が大きな関心であったが、与三の状況を具体的に考察するうちに与三へと関心が移っていった。授業の最後に、もし自分が与三の立場だったら……:という一言を学習プリントに書いて提出してもらった。そこには、「女房と子供を捨てて逃げる」「おそらくたえられない。生きるのに疲れて

いるかもしれない」「死にたい！でも生きたい。セメントに飛び込みたくなるより」「働いてもあんまりお金にならなくてお酒も飲めないなんて、嫌だし、苦しい。家族のために頑張るのは大変だな」「手紙に対して）同情なんぞしてられないし、気味が悪い。こっちは低賃金・重労働なうえに子供が六人、俺だっついっそコンクリートになってしまいたい」など、最終的には与三の日常に對する不満・怒り・やり切れなさに共感を示す意見が多く見られた。主人公である与三の人物形象を、ある程度の実感を持って確認することができたのではないだろうか。

### (3) 三時間目——女工の矛盾とその気持ち

三時間目は、生徒の大きな関心であった女工の手紙の部分の読解に取り組んだ。復習の意味も込めて初発の感想の中から、いくつかを取り上げ前週提出した学習プリントの裏に印刷して返した。女工が可哀想だという以外の感想は、次にあげるようにほとんどが女工とその手紙の意図に関するものだった。なお、生徒の文章については、個人の表現を尊重するため原文のまま引用する。

A 私はこの小説を読んで一番に感じたのは、手紙の残酷さです。その中に私は一つの疑問を抱きました。それはなぜこの手紙を書いた人が、顔も全く知らない労働者に対して、私を可哀想だと思ってお返事下さいと同情を求めている点

です。私はおそらく、このセメントとなつてしまった恋人と同じ目にあわせないための訴えのようにも聞こえました。これに對して、怖くなった（低賃金でこのような事故がある可能性を知つて腰が引けて止めたかと思つている）労働者に細君が子どものためにと励ましているようにも見えました。

B とにかく想像しただけでも背筋が凍り付いた。普通、恋人を碎いて作つたようなセメントは、使つて欲しくないと思えるだろうし、使う立場に立つてみても、絶対につかいたくないと思う。それなのに、この手紙を書いた女工は、逆に「どんな処にも使つて下さい」と書いているあたり、この女工が恋人に對する気持ちはどこかずれていると思うのだが、どうして彼女はそんな風に考えたのかがよくわからない。

C もし本当にこんなことが起つていたらこわいし悲しいと思います。しかし手紙を入れた女性は恋人がセメントになつたことを手紙に書くのはまだ分かりますが、全く見ず知らずの人に、恋人の服やどんな恋人だったのかなど書くことは、実際今だったらうっとうしがられるかもしれないし、同情を引くことしけません。何で書いたのかと思えます。

D とても気味の悪い話だけれど、手紙を書いた人が私はすぐ気になりました。恋人が亡くなったのにどこか冷静で、

どうしても返事を欲しがって、もし返事をくれたら大切な恋人の着ていたものをあげるといふ、少し変わった人だなあと感じました。結局その後手紙の返事を書いたのか、手紙を書いた人に何か変化はあったのか、行方が知りたくなりました。事故で命を落とすのは、すごく切ないことだと改めて思いました。

E  
何か気味が悪かった……とても怖い。自分の恋人がセメントになつてしまつたら立ち直れないし、とつても悲しい。なぜ、樽の中に手紙があつたのか……そこに手紙があつたという事は樽にセメントになつた恋人が入つてゐるのか……気になる。もう一つ、与三さんが怒鳴つた理由が知りたい。あたしが考へるのは、たぶん「こんな事件あつてはいけないことだ。ありえない。」つて思つたからワーツてなつたんだと思う。

F  
気になることが二つあります。人間は簡単に細かくなると思ふけど、血があつて真っ赤に染まつてしまふと思ひます。それに不純物があると、しっかりしたのが作れないと思ひます。また、この小説を労働者が読むと、身体的に参つてゐるのに、精神的にもおかしくなつてしまつて、よからぬ行動をしてしまふと思ひます。なので、良いのか悪いのかさっぱり分かりません。

これらの感想を出発点に、女工の手紙の部分に対する感想や疑

「読書」すること・「読解」すること

問を口頭で発表してもらつた。「かわいそう」「分かる！」など同情・共感の意見の他に、「冷静」「こわい」「グロイ」など様々な意見も出るが、何よりも生徒が知リたがつたのは、この女工の話が「ウソ」か「ホント」かということである。そこでその真偽を考察するためにも、まずは手紙（女工の話）の特徴や、分かつたことと分かつたことの整理から始めた。分かつたこととしては、次の内容があがつた。

- ・セメント袋を縫う工場の女工。
- ・死んだ次の日に手紙を書いていること。淡々としている。
- ・恋人は立派にセメントになり、仕事着のボロが残つたこと。
- ・労働者にこだわっていること。
- ・詳しい処書きと使用場所を知リたがっていること。
- ・恋人の仕事着に手紙を包んだこと

そして、分かつたこととして指摘されたのが次の内容である。

- ・手紙を入れた方法は何か。
- ・袋を縫っている女工が、なぜ樽にいれることができたのか。
- ・女工の態度は冷静すぎないか。
- ・使命感のようなものは何なのか。
- ・なぜクラッシャーで人間だけが粉々になつたのか。

- ・労働者以外の人々とはだれなのか。
- ・「幾樽も」手紙を入れて全国各地に送ったのか。
- ・所書きを聞いてどうするつもりなのか。
- ・なぜ形見の仕事着を他人に渡すのか。

生徒たちは本文を何度か読み返し、矛盾や疑問が残る部分を口々に言い合っていた。普段の授業では受動的な態度を示す生徒も、積極的に意見交換する姿がみられ、間違い探しをするように本文から矛盾点や疑問点を見つけていた。またこの作業の中で「こうかいてあるけど……」と本文の記述に注目して考えることに、自然と慣れてきたようだった。分かったことと分からなかったことを見比べることで、分かったことについても、なぜか理由が分からないことが多いのに気付き、「じゃあ、なんでそんなことを言うのか」「そもそも、何のために手紙を書いたのか」という問いに行き着く。教室の意見は、女工は「可哀想」ではなくて、「わざと」手紙を書いた「頭のいい人」ということにまとまった。

それを受けて、本文を手がかりに矛盾や疑問を考察する。手紙に表れた女工の「想い」とは何なのか。「立派にセメントとなりました」「残ったのはこの仕事着のボロ許り」から、人間の身体だけが粉碎されセメントになったことに注目した。「どうして人間の身体だけなんだろう?」と問いかけると、「労働者とセメントは似ているところがあるから」と返ってきた。「どこが?」と尋ねると、「建物の土台と社会の土台」「目立たないところで支え

ている」などの意見が出てきた。それと関連して、「呪の声を叫びながら」における「呪の声」は誰に対して向けられたものなのか。「此セメントをそんな処へ使わないで下さい」の「劇場の廊下」や「大邸宅の堀」はどのような場所なのか。出てきた意見を板書し、話し合いを繰り返すことで労働者としての苦しみや、お金持ちに対する嫌悪感という答えを導くことができた。また女工の「あなたが労働者ならば」という強いこだわりや、「私を可哀想と思って」「恋人をそんな処へ使わないで」「お返事を下さい」「あなたも御用心」という言葉から、女工には労働者に対する仲間意識があり、共感を生み出したがっていることに注目できた。

「じゃあ、何の目的で?」という問いかけには「労働者とのつながりを持ちたいから」と返ってきたが、「つながってどうするの?」という問いかけには様々な解釈があった。

初めの授業計画では、本文の読解にはある程度こちら側から解釈を与えようと思って準備していた。しかし、ほぼその必要はなく生徒の発言に引つ張られる形で授業が進んだ。一読したときの「可哀想」な女工の印象と、細部を読むたびに現れる人物像がずれていくことに興味を持ったようだった。改めて、生徒の好奇心を育むことが「読む力」を引き出すのだと感じた。

#### (4) 4時間目——与三の心情の変化

四時間目は女工の手紙を読んだ後の与三の反応を考え、女工への手紙を書かせて四時間のまとめとした。はじめに、第一段落と

第三段落から与三の心情が分かる部分を抜き出して板書し、読み比べて変化があるかどうかを考えた。生徒があげたのは次の部分である。

### 《第一段落》

「チエツ！ 嬢は又腹を膨らかしやがった」

「彼はウオウヨしてる子供のことや、又此寒さを目掛けて産まれる子供のことや、滅茶苦茶に産む嬢の事を考えると、全くがっかりしてしまつた」

「日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、飽棒奴！ どうして飲めるんだい！」

「世の中でも踏みつぶす氣になつて自棄に踏みつけた」

### 《第三段落》

「子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた」

「へべれけに酔つ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊してみてえなあ。」と怒鳴つた」

「細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た」

比較したときに何となく違うことは分かつて、なぜ自分がそう感じたか、どう違うのかを言葉にするのに四苦八苦していた。

「どちらも現状に対して怒っている」「第一段落では目の前にあることだけ腹を立てていて視野が狭い」「第一段落では与三は自分のことだけ考えて、家族に八つ当たりしている」「第一段落で

は全部家族が悪いと思つてゐる。責任逃れしてゐる」「第三段落では家族以外のことキレてゐる」「第三段落の方が怒りが大きくて、理由がはっきり分かつてゐる氣がする」「第三段落は環境を変えたがつてゐる」などの意見が出た。「女工の手紙から、与三は何に氣付いたのか？」と問いかけると、「生活が苦しくなる原因が家族じゃなかつたこと」と返つてきた。「じゃあ何が原因？」という問いに対しては、上司・労働環境・貧乏など様々な答えが出た。「女工の手紙の中にあるお金持ちに対する反感に触発された」という意見も出た。最終段落の「何もかも」に家族が含まれるかどうか、とういことが論点になつており、色々な解釈が噴出した。この状況に方向性を与えたのは、ある男子生徒の「細君で誰ですか？」という質問であつた。妻のことをいう言葉でここでは「嬢」のことだと伝えると、「なんで与三は呼び方を変えたんですか？」と、本文中で「嬢」が「細君」に変化していることに注目していた。このことから、与三は家族を大切に思つており「何もかも」には家族は含まれないという解釈が教室に生まれた。これは説得力を持つて受け入れられたものの、答えを明確に絞ることはせず、自分の解釈を手紙の内容に反映してもらふことにした。

その後、十五分程度で与三の立場から女工に手紙の返事を書く作業をした。二時間目で与三の人物形象を把握してあつたことと、四時間目に心情の変化を確認したことで、思ひのほか抵抗なく書いていたようだった。机間巡視をしながら、個々の質問に対

応する。そこには女工や与三など作品に対する質問とは別に、「筆者は何のために、誰に向けてこんな小説を書いたのか」という重要な疑問があった。しかし、時間がなく小説の意図を一緒に考える時間は残されていなかった。そのため手紙の返事を回収した後に、「与三が女工の手紙を読んで考え方が変わったように、労働者がこの小説を読むとどうなるか」という投げかけをした。

すると「どうにかして環境を変えようとする」「そのために仲間や方法を探す」という意見が出たので、「プロレタリア小説」についてほんの少しだけ触れてまとめとした。明らかな説明不足や語り残しが気になったが、生徒の書いた手紙の内容を見て、生徒は言葉よりも先に理解していたことを痛感した。

A わたしたちは毎日毎日……汗水流しながら働いている。しかし、ほんの少ししかお金がもらえずに毎日、生活するのはしんどい。しかし、お金があるような奴は、お金がいっぱいあるため、劇に行ったりしている。劇の廊下になってこんな奴らに踏まれてイヤな思いをするのは当然ですよね。とてもあなたの気持ちが変わります。今までこのようなことを考えたことはありませんでした。だから、この手紙をもらい、いろいろ考えさせられ社会に対するいらだちを覚えました。もう、やる気がなくなり何もかもぶち壊したい気持ちでいっぱいです……。あなたと一度お会いしてみたいです。お手紙ありがとうございます。

B

あなたの恋人の事件で、私は労働について考えさせられることができました。悲しいことですが、生きていくことに必死です。働かなければ家族が生活することができない。今、働く環境を良くしようと、労働仲間と団結し、上の者にかけ合うことが必要だと思います。この矛盾した社会の中、私のような労働者一人では、何の力も持っていません。支配者の命令に従っていけば、良い社会になることはありえないのです。考えてみると、労働者という存在がないと社会は成り立つことがない。だから、この社会を変えられるのは労働者なのです。頑張って団結しましょう！私はあなたの恋人と同じ労働者です。私はあなたの手紙を読むまで、世の中など広い範囲を見ず、身近の子どもや嫌はずつとせめていました。休む暇もあまりとれず家族に働かせていると思っていました。しかし、あなたの手紙を読み、私は不安になりました。とてもやりきれない気持ちになりました。私を苦しめていたのは、この社会や私をやとっていた会社、この仕事でした。今までの私も私はなぜ広い範囲を見れなかったのだろうと悔やみます。これから私はどうしたらいいのかわかりません。この世の中が憎く、やりきれません。

D

手紙読みました。つらかったですね。貴方の彼氏のご冥福をお祈りします。私はこの仕事をやめたいと思ったことはたくさんあります。でも、家族を養うために働かなければ



なりません。きっとあなたの彼氏さんも働かなければならなかったでしょう。私はろくでもない人間だから、こんな所で働くのです。なのでここで働いている人たちはお金持ちの人をねたんでいる人が多いと思います、きっとこの人も……。あなたの頼みは守ります。大邸宅とかには使いません。この手紙を見て私は働く気が失せました。

私にはなにもできませんが、日給の安さ、安全性の面を国がわかってくれたらいいですね。私たち労働者としての気持ちは私たちにしかわかりません。彼氏のボロ着はちよつと気持ち悪かったけど、あなたの苦しみは、痛いほどわかります。私はあなたの味方です。お元気で。

## E

あなたの恋人さんを決して、劇場の廊下や大きな邸宅の塀にしたりしません。今まで私は、社会のシステムが悪いのに気付かず、貧しいのは細君や子供のせいにしていました。気付かせてもらえて良かったです。それを知ることが出来ても、私には何もできません。この仕事を辞めてしまえば、私だけでなく細君や子供にも、ごはんを食べさせてあげられなくなります。私は、この手紙を受け取った時気持ち悪く少し害しましたが、今となつては、受け取れて良かったのかなと思います。

労働者が苦しむ世界は嫌ですね。私は、あなたの恋人さんの経歴をいかして注意して働きます。最後になりましたが、お悔みを申し上げます。

## F

私はこの手紙を読んで、あなたの悲しみ、つらさがわかりました。なぜかという私も、あなたの恋人人のように労働の仕事をしていました。恋人のようなつらさは本当にわかります。こんな世の中にしたのは、お金持ちやえらいと思つている人、支配している人のせいだと私は思います。こんな世の中に私は心からはらだつており、がっかりしています。

私はあなたの恋人をいつか必ず見つけ出します。劇場や大邸宅ではなく一般の人が歩くような所に必ずあなたの恋人はいると思います。私はそう願っています。もし、見つけたら私はあなたにすぐ連絡するので、ぜひ見に行つて下さい。

こんな世の中ではなく、差別がない世の中、貧しい暮らしから逃れられるように、平和な世の中になるように私は願っています。

このように、連帯・団結というモチーフは、これが「プロレタリア小説」であることを知らなくても伝わるモチーフだったのである。単語を説明するだけで安心しようとしたことを、私自身大きく反省した。また手紙の返事を書くことには賛否両論あるだろう。与三は手紙を書くような金銭的・体力的・学力的余裕があったのか。与三はどこまで覚醒したのか。団結や連帯につながつたのか。テキストの問題も解釈もたくさんある。手紙の返事を

書かせるにしても、与三の労働者言葉で書かせるなどの制約を設けたほうが良いのかもしれない。しかし、私が教室という空間、授業という時間で確認したかったのは、それぞれの生徒がこの作品とどのように繋がったのかということであった。

A 最初は何事かと思いましたがあなたの彼もきっとコンクリ

ートから洋服を着た人達をにらみ続けることでしょう。

B 私は貝になりたいとあなたの手紙を読んで思った。なぜあなたは俺なんかを求めたのか、それを考えろと何のやる気も失ってしまう。俺はあなたのような考え方をして生きてない。あなたの恋人がセメントになったか知らないが俺の知ったことじゃねえ。でも、あなたは恋人の分まで強く生きる。俺からはそれしか言えない。

C あなたの手紙を読ませてもらいましたが、恋人がお亡くなりになり大変なことだと思います。私はセメントあけをやっている労働者です。しかしあなたの手紙の内容にいくつか納得できないところがあります。それはわざわざ手紙を恋人の形見とも言える仕事着のボロに包んで私にくださったことです。なぜ恋人の大事な形見を見ず知らずの人にあげようと思ったのでしょうか。またなぜセメント袋を縫う女工であるあなたがセメント樽の中に手紙を入れることができたのでしょうか。このようなことを聞くのは大変失礼なことかも知れませんが、本当にあなたの恋人は死んでし

D

まったのでしょいか。そもそもあなたはセメント袋を縫う女工なのでしょいか。どうか真実を教えてください。はじめまして。私は労働者で手紙を読んであなたに興味を持ったので返事を書きました。あなたは彼を亡くし、すぐつらかったです。しかし私は、あなたを可哀想だとは思っていません。むしろ私達労働者に対して、おどしているように感じました。そして、あなたをそのようにしてしまったこの会社やお金持ちの人を恨みました。でも、私はこれからも家族のために働き続けなければなりません。だから、社会なんかには負けません。きつとあなたの彼もそう思っていたことでしょう。そんな彼を私は見殺しになんてできません。同じ労働者として、彼の気持ちはすごく分かるし、あなたのためにも彼を必ず見つけ出します。こんな私を、そして社会を信じてくれることを祈っています。あなたからの手紙を読みました。恋人が死んだ次の日なのにすごく冷静に書いている為びっくりしました。つらかったとは思いますが。でも労働者としては、そういう事件がたくさんあるので、つらい現実ですが、頑張って立ち直って下さい。ですが、私はセメントがどのように使われるかは知りません。そしてこの仕事着もお返しします。これは、あなたにとって大切なものはずです。私には必要ありません。そして、もうお返事はいりません。さようなら。

E

あなたからの手紙を読みました。恋人が死んだ次の日なのにすごく冷静に書いている為びっくりしました。つらかったとは思いますが。でも労働者としては、そういう事件がたくさんあるので、つらい現実ですが、頑張って立ち直って下さい。ですが、私はセメントがどのように使われるかは知りません。そしてこの仕事着もお返しします。これは、あなたにとって大切なものはずです。私には必要ありません。そして、もうお返事はいりません。さようなら。

文章の長さも言葉遣いもバラバラである。しかし、作品の中にある問題に対してそれぞれの立場がしっかりと現れている。手紙の返事は次の時間に全員分印刷して配布した。生徒はそれぞれの手紙に対してコメントをつけながら、新たな発見を繰り返しているように見えた。

#### IV おわりに

最後の授業が終わった後、生徒たちは「こんなに深いと思わへんかった!」「こんなに考えて読んだことない!」「最初と全然ちやうやん!」「頭つかれた!」と口々に言っていた。しかし、不満そうな表情を浮かべる生徒はなく、それぞれが充実した様子だった。大きく読みが変わっていく過程を体験することが、作品を精読する喜び・楽しさに繋がったのではないだろうか。四時間の授業を通して少しでも本文に基づいて考えること、作品を深く読む楽しさには気付いてもらえたように思う。この次の作品として、太宰治「待つ」を扱った。そのときの課題プリントには「こうかいてあるからこうだ」と、本文を考えの根拠にあげる生徒が多くなっていたことも収穫だと思う。

また「プロレタリア小説」という単語を出した瞬間に「蟹工船!」という生徒が何人かいた。他にも授業中に「今も派遣切りとかワーキングプアとか変わらへんやん」と、自然と自分の身の回りに問題を置くことができていたのには驚いた。授業終了後

も、「前読んだ小説読み返したら、何か全然違ってた」と再読した感想を教えてくれる生徒、「セメント工場で実際事故あつてんでー!」など調べたことを報告してくれる生徒、また、「子ども一人育てるのに三千万くらいかかるらしい! 親に感謝せな」という話をしてきた生徒がいた。教科書も指導書も何もなく、生徒と一緒に手探りで読みすすめた授業だったが、終わってみると大きな達成感を得ることができた。それは「セメント樽の中の手紙」の〈物語〉が生徒の日常にしっかりと根付き、新たな〈物語〉として育まれていく手ごたえを感じたからであろう。

(やはら・かな 龍谷大学付属平安高校常勤講師)